

新聞を手にも、世界の扉を開く

宮崎県立高城高等学校
教諭 横山 康代

1 はじめに

本校は各学年普通科2クラスと生活情報科1クラスからなる小規模な学校である。小規模ならではの利点として、生徒全員に目が届き、全体での指導が行いやすい。今回のNIEの活動においても、その利点を活かすことを考慮した。

通常は図書室に新聞を2紙置いている。しかし、目を通す生徒は限られている。授業の合間の休み時間や昼休みに腰を落ち着けてじっくりと新聞を読もうにも生徒は忙しい。また、インターネットが整備されたこともあり、新聞を購読していない家庭もある。携帯電話のニュース欄を利用している生徒もいる。ヘッドラインだけを読んでいる生徒もいる。このような実態と新聞記事の持つ意義を考えると、学校生活の中に「新聞を読む」という習慣を取り入れることは重要であると考えた。

そこで、今回のNIEの活動を通して、新聞に親しみ、新聞を読むきっかけを作り、新聞というアイテムを手にも、さらに広い世界への扉を開くきっかけを作る実践を試みた。

2 NIE実施時期と新聞の設置場所

本校は本年度初めてNIEを実施した。9月より、朝日新聞・読売新聞・日本経済新聞・毎日新聞・西日本新聞・宮崎日日新聞の6紙を一部ずつ4ヶ月購読した。既読紙は朝日新聞と宮崎日日新聞である。新聞の利用はまず教師主導で行った。クラスによっては記事をもとにスピーチを行ったり、記事をもとにした教材プリントが配布されたり、レポートの課題に添った記事の利用を課した。記事探しに図書室へ来る生徒は新聞に慣れていないと、タイトルを追うのが精一杯であった。政治や社会など長い文章の

記事の場合の場合は、割り付けがわからず、次はどこを読んでいいかわからないというものもあった。

生徒、特に3年生は受験対策としても政治・経済・社会などの記事に目を通すのが理想である。しかし、普段新聞を読むことが習慣となっていない場合は少しハードルが高いと感じていたようだ。

図書室では当日の新聞は、コーナーを設置し生徒の閲覧に供した。その月の新聞は図書室内の棚に保管し、いつでも閲覧できるようにした。また読みやすいようにクリップでとめた。切り抜きや持ち出しは2ヶ月を過ぎてからにした。2ヶ月経過した新聞は図書室前の棚に置き、切り抜きも持ち帰りも自由とした。この流れは事前に告知しておき、さらにその都度「本日より〇月分の新聞が切り抜けます、持ち帰れます」という連絡も行った。

3 実践報告 その1 地元紙の威力

購読している新聞の1つに宮崎日日新聞がある。「宮崎」という名称を持ち親しみやすさがあるのか生徒は真っ先に宮崎日日新聞を手取る。さすがに、地域ニュースの報道が充実している。反面、限られた紙面という条件では、他紙に比べると全国ニュースの報道に若干の物足りなさを感じられる。しかし、以下の2点から地元紙の有用性を確認出来た。

< I 受験のために地元を知る >

3年生の受験対策の一環で、地元への理解を深める必要があった。一般に本校生は、地元都城の産業や観光については実感を持って語れるが、県内全域となると詳しくないという弱点がある。そこで、宮崎日日新聞の「旅のひとつこと」

というコーナーを切り抜き、利用した。「旅のひとこと」は、宮崎へ仕事や観光で来た人へのインタビューコーナーである。毎日1人ずつ掲載される。居住している県民が見過ごしがちなことが旅行者の生の声で出ている。交通アクセスの不満や宮崎の観光で良かった点、食べたものなどが、気負いのない調子で語られる。個人の力では得ることができない情報である。宮崎に来た幅広い年齢層の人々の声を耳にすることができる。生徒の反応も上々で驚きとともに楽しみながら切り取っていた。今後の地域のあり方を考える資料のひとつとして利用価値が高いと感じられた。

< II 口蹄疫の事実を知る >

平成22年、宮崎県で口蹄疫が発生したときから、記事を職員でスクラップし続けている。

発生当初は全国紙での扱いは小さく情報量も少なかった。しかし、宮崎日日新聞では詳細な記事を書き続けた。感情が前面に出た印象の記事もあったが、逆に生徒の共感を生んだ。口蹄疫収束後も検証記事を掲載するなど、根気強い取材が続いている。地元新聞ならではの熱い気持ちが生徒に伝わって宮崎日日新聞を真っ先に手に取る生徒が増えた。

また、口蹄疫の記事では以下のような要素を取り出し、NIEの教材として使った。

地方紙と全国紙の記事の占めるスペースの差



- ・全国からの視点と、発生地からの視点の差
- ・発生農家による、生々しい現場の投稿写真と、それに対する読者よりの賛否両論

本校は地域柄農業に従事している家庭も多く記事を読んだ意見発表は熱がこもった。さらに、それをきっかけにして生徒達の中から、何か出来ることはないかという声が出て、発生後すぐに雑巾を届けたり、激励メッセージを作成したりした。地元、または九州圏内を進路に考える生徒が多い本校の生徒のことを考えると地元紙宮崎日日新聞を精読することは必要だと感じた。記事の内容も地元の手厚いので生徒にもなじみがあり、読むきっかけとしては一番ふさわしい新聞なのではないかと感じた。

4 実践報告 その2 コラムを読む

国語科ではコラムを利用した教材を用意した。授業の導入や課題として用いた。具体的には文中の語句の意味や慣用表現を調べ、語彙を増やすこと、要約によって読解力をつけること、感想を記入したり、友人と声に出して感想を読み合い聞きあうことを行い、話すことや聞く態度



を養うことを目標とした。

また、学年通信をはじめとした学校からの配布物の裏面にも必ずコラムをはじめとした記事を書き載せた。

5 実践報告 その3 HAPPY NEWS を探す

HAPPY NEWSは毎年日本新聞協会が募集しており、一冊の本にまとめられて出版されている。本校図書室でもその本は所蔵されており、生徒によく読まれる一冊となっている。そこでHAPPY NEWSを探す試みを行なった。

最初に各クラスの図書委員が実践を行った。それを見本にして、各クラスでHAPPY NEWS探しを行った。「HAPPY NEWS」というテーマがよかったのか楽しげに活動していた。記事を切り抜いたならば色紙に貼付すること、簡単なコメントを付けることを条件に、集められたHAPPY NEWSは教室に掲示した。新聞は事件や犯罪、事故などといった暗い出来事や、重いニュースが紙面におどる。しかし、その隙間に存在する、きらりと光る記事、心温まる出来事、読んだ人を幸せにする記事を発見する喜びを生徒は味わっていた。

6 課題

今回の実践は現段階では、新聞を読むきっかけとしてのものでしかない。政治・経済などの記事を読み、数紙を読み比べて自分の意見を導き出すといった一つ上の段階まではまだ到達できていない。

記事を効率よく探すために、新聞のどの面にどのような記事が掲載されているかといった読み方の指導から始めなければならなかった。3年生が受験前に準備をする様子を見ると、高校に入った時点から新聞を読む習慣をつけることが、受験対策のみならず、学習の基礎作りの上でも大事だと痛感している。

新聞を購読していない家庭や読む習慣を持たない生徒が増えた。、図書室へ足を運ばせるのもなかなか簡単ではない。しかし、携帯電話を数多くの生徒が所持し、ネット上では様々な情報

が流れる現在、新聞記事の持つ信頼性と記録性を考えると新聞を利用出来る高校生であってほしいと考える。生きた教材としてより一層授業での活用を検討したい。